阿波学会紀要　第57号(pp.165-176)　2011.7

つるぎ町一宇の方言

方言班（徳島県方言学会）

仙波　光明[*1]　　村田　真実[*2]

要旨：上郡北方山分に属するつるぎ町一宇の方言調査の報告である。この地域はアクセントに特徴があり，二拍名詞三類のアクセントに揺れが見られることが分かった。また，『一宇村史』に記録された方言語彙について，その残存状況を確認した。さらに文法項目についての調査から，共通語化の進展および方言形との使い分けについて，特に音便形の使用において確認することができた。

キーワード：アクセント，徳島型，２拍名詞，３拍動詞，中世日本語

はじめに

今回の調査は，三つの方法で行った。調査票の読み上げによるアクセント調査，『一宇村史』（以下，『村史』と呼ぶ）の「方言」の項に収録された事項の確認，これまで数回の調査で利用してきた調査票（仙波他『徳島県言語地図』2002年を基本とする）による調査である。調査は，2010年10月28日と11月18日に一宇公民館で行われ，後述する10名の方々の協力を得た。なお，アクセントについては村田が直接聞き取りを行った２名の方のデータを用いた。

１．つるぎ町一宇の方言区画上の位置づけ

徳島県の方言区画上から見た，つるぎ町一宇は，森重幸（1982）によると，祖谷・山城とともに「北方山分」に属する。東隣は下郡山分の旧木屋平村，そして，北隣は旧穴吹町，旧貞光町，旧半田町に接し，南は旧東祖谷山村である。祖谷・山城は三好山分とされ一宇の属する「美馬山分」とは別の区画に整理されているが，三好山分と美馬山分は，アクセントの型が異なっていることを主な理由として区画されていると思われる。また，この美馬山分に属するのは，一宇だけであり，隣接する貞光や半田とはアクセントの型を共有するが，「起きよう」を「起きゅう」と言うかどうか，「死ぬる」と言うかどうかなどによって区分されている。

２．アクセント

１）概要

本稿では，つるぎ町一宇（以下，一宇と呼ぶ）のアクセントについて，その体系を記述する。先行して当該地域に触れたものとして，森（1982），上野善（1985），上野和他（1991），上野和編（1997）などがある。これらはどれも1990年代までの調査結果であり，それから10年以上経った今，2010年の一宇のアクセント体系の現状を明らかにすることが，本稿の課題である。

徳島県下のアクセントの詳細は**表１**のようになっている。（生田・1951，山名・1956，森・1982，上野善・1985，上野和／仙波／森・1991，上野和編・

＊１　徳島大学ソシオ・アーツ・アンド・サイエンス研究部　　＊２　徳島大学大学院総合科学教育部地域科学専攻博士後期課程

1997）**表1**の通り，定説では一宇のアクセントは山城谷式であるとされる。山城谷式アクセントがどのようなものかを確認しておくと，分布地域は徳島県西部の山間部にあり,つるぎ町一宇・同貞光・半田,山城町である。二拍名詞の統合状況にその特徴があり，統合数は3で，（1・3・5／2／4）となっている。

表1　徳島県下のアクセント分布

京阪式（龍神型）		県東部
京阪式変種	垂井式	三好市西祖谷山村・東祖谷山村 那賀町木頭村
讃岐式（池田型）		県西部
讃岐式変種	山城谷式	美馬郡つるぎ町一宇・貞光・半田 三好市山城町
	出合式	三好市池田町出合

本稿で使用するデータは，2010年に徳島方言研究会が行った調査の結果であり，一宇在住者2名にご協力を頂いて得たものである。ご協力下さった話者については**表2**に示す。

表2　話者情報

ID	現住所	生年月	性別	職業	父出身地	母出身地
1	一宇 字切越	1930年 3月	男	林業	一宇	一宇
2	一宇 字蔭	1939年 6月	男	農業 役場	香川県	一宇

調査は読み上げ式の面接調査であった。類の別とその所属については『早稲田語類』に従った。調査語については後述する。なお，本稿では表記上の煩雑さを避ける為に，それぞれのアクセントを示す際に記号を用いた。Hを高拍，Lを低拍として記述し，特に助詞を表したい場合はハイフンで繋いだ（「梅が」ならLH－Lと表記する）。

2）一拍名詞

一拍名詞について，調査した項目は次の通りである。

表3　一拍名詞調査語彙および音調

	語彙	音調
第一類	蚊，血，実	H／H－L
第二類	名，葉，日	H／H－L
第三類	絵，木，手	H／H－L及び L／L－H

今回は調査した語が少なかった為に第三類の音調については断言し難いことをまず述べておく。その上で観察してみるに，全ての類が統合されており，その音調はH／H－Lになっている。第三類の「手」についてのみ，どちらの話者からもL／L－Hが聞かれた。

3）二拍名詞

二拍名詞について，調査した項目は**表4**の通りである。

表4　二拍名詞調査語彙および音調

	語彙	音調
第一類	飴，梅，枝，顔，風，酒，鼻，桃，中，柿，首，鳥，水，道	LH／LH－L
第三類	泡，池，色，腕，馬，皮，草，雲，倉，事，玉，花，腹，山，足，犬，鬼，貝，神，靴，髪，鯛，月，年，波，蚤，耳	
第五類	雨，井戸，桶，蔭，声，蜘蛛，琴，鮒，窓，鮎，秋，黍，鯉，猿，蛇	
第二類	歌，音，川，下，寺，人，村，石，紙，夏，垣，橋，雪，冬，町	HL／HL－L
第四類	栗，糸，稲，笠，肩，今日，下駄，空，舟，息，海，箸，松	LH／LL－H

類の統合数は3で，統合状況は（1・3・5／2／4）となっている。このような統合状況から，今回の調査でも一宇が山城谷式アクセントの体系を保持していることが分かる。以下，統合順にイレギュラーな音調が聞かれたものを特に取り上げて見ていく。

第一類について，ほぼ全ての語からLH／LH－Lが聞かれたが，「雨」「中」についてはどちらの話者からもLH／LL－Hが聞かれた。これらの語は，山城谷式では第四類に相当すると考えられる。

第三類について，主にLH／LH－Lが聞かれたわけであるが，「皮」についてはLH／LL－Hが聞かれた。坂本他（1998）によると「皮」という語は京阪式でも特殊な動きをしており，山城谷式でも第四類相当の語となっている。また，第二類相当になる語もある。「事」「花」「神」「貝」「波」である。「事」「花」「神」については同音の「琴」「鼻」「髪」がLH／LH－Lになっている為，混同を避けるべく変化したものと考えられる。「貝」「波」については何

故このような類を逸脱するような音調が聞かれるのか分からない。

第五類については安定してLH／LH－Lが聞かれた。

第二類についても安定してHL／HL－Lが聞かれたが，唯一「垣」だけがLH／LH－Lという第一・三・五類相当の音調が聞かれた。「垣」自体あまり日常的に使われない語である為，同音の「柿（第一類)」に引かれてこのような音調が聞かれたものと考えられる。

第四類について，「栗」と「海」がLH／LH－Lとなり，第五類相当の語となっていた。

4）三拍名詞

三拍名詞について，調査した項目は**表5**の通りである。

三拍名詞については，類の単位で音調を持つという傾向が少なく，類内で分裂している（分裂した語群をそれぞれx及びyと置く。語群の別は二拍目の母音の広狭に関わらない)。分裂したものまで加味して類の統合状況を見ると，（1x・2x・4・5x・7／1y・2y／3・5y／6）となり，統合数は4となる。その状況を示すために音調別に語を整理し直したものが**表6**である。

表5　三拍名詞調査語彙および音調

	語彙	音調
第一類	筏，柳，鰯，飾り，霞，形，着物，煙，子牛，都，氷，魚，机，鼻血，羊	x) LHL／LHL－L 或いは y) LHH／LHH－H
第二類	間，小豆，毛抜き，釣瓶，蜥蜴，二つ，二人	
第三類	黄金，小麦，力，二十歳，岬	HLL／HLL－L
第四類	頭，恨み，男，思い，表，女，言葉，刀，宝，鋏，東，光，袋，仏，鏡	LHL／LHL－L
第五類	朝日，命，胡瓜，心，姿，涙	x) LHL／LHL－L 或いは y) HLL／HLL－L
第六類	兎，鰻，烏，狐，高さ，鼠，雀，背中	LLH／LLL－H
第七類	苺，後ろ，蚕，鯨，薬，病，兜	LHL／LHL－L

表6　三拍名詞について整理し直した表

音調	語彙
LHL／LHL－L	①霞，着物，煙，子牛，都，魚，机，羊　②間，小豆，蜥蜴，二つ，二人　④男，思い，表，女，言葉，刀，宝，鋏，東，仏，鏡　⑤命，涙　⑥背中　⑦苺，後ろ，蚕，鯨，薬，病，兜
LHH／LHH－H	①筏，柳，鰯，飾り，着物，氷　②毛抜き，釣瓶　③黄金　④袋
HLL／HLL－L	①形，鼻血　③小麦，二十歳，岬　⑤朝日，胡瓜，心，姿
HHL／HHL－L	③力　④頭，恨み，光
LLH／LLL－H	⑥兎，鰻，烏，狐，高さ，鼠，雀

5）動詞

動詞について，調査した項目は**表7**の通りである。

二拍動詞第一類の音調はHLであった。第二類の音調はLHであった。二拍動詞については類の区別がある。

三拍動詞は類の区別がなく，すべての語についてLHLが聞かれた。第一類から第三類までが統合している。統合されて聞かれる音調はLHLであった。

表7　動詞調査語彙および音調

	語彙	音調
二拍・第一類	売る，置く，買う，泣く	HL
二拍・第二類	打つ，書く，切る，飲む	LH
三拍・第一類（五段）	余る，痛む，祈る，動く	LHL
三拍・第一類（一段）	植える，借りる，消える，捨てる	
三拍・第二類（五段）	遊ぶ，登る，拾う，運ぶ	
三拍・第二類（一段）	生きる，起きる，落ちる	
三拍・第三類	歩く，隠す，入る	

6）形容詞

形容詞について，調査した項目は**表8**の通りである。

表8　形容詞調査語彙および音調

	語彙	音調
二拍・第一類	－	－
二拍・第二類	無い，良い	LH
三拍・第一類	赤い，浅い，甘い	HLL
三拍・第二類	青い，白い，狭い	HHL

二拍形容詞第二類はLHであった。

三拍形容詞は第一類と第二類の区別を保持しているところにその特徴がある。即ち，第一類はHLLで実現され，第二類はHHLで実現される。今回調べた語については，「青い」はHLLで第一類と同じ音調が聞かれたものの，「白い」「狭い」はHHLと実現された。「青い」については一拍目と二拍目が

連母音になっていることが，HLLが聞かれることに関係している可能性がある。

7）まとめ

二拍名詞の統合状況から，一宇のアクセント体系は山城谷式にあたることが再確認された。先行研究の時代から10年経っても同じ体系を保持していると言える。

3．その他の音声的特色

県下各地で観察されてきた，サ行のセ，ザ行のゼがそれぞれ口蓋化したシェ［ʃe］・ジェ［ʒe］になる，合拗音のクヮ［kwa］・グヮ［gwa］が残っている，ダ行音の前に鼻音が現れるといった現象は，ほとんど確認できなかった。

ところで，『村史』の「方言」の項を見ると興味深い事項が見つかる。その一つは，アイ連母音の音変化にかかわることである。

あきゃー　赤い
こみゃー　こまい，小さい
ひゃーて　穿いて
わきゃ（とき）　若い（とき）

この四つの語は，それぞれ［akæː］，［komæː］，［Çæːte］，［wakæ］と発音されたことを示すとみられるが，もしこれが確かな事実の反映であると考えてよいとすれば，一宇方言において，連母音［ai］が長母音［æː］に変化することがあったということになる。このような変化は名古屋方言がよく知られており，岡山市（虫明1982）や広島県備後地区（神鳥1982）でも観察されている。徳島県においては，「赤い」の類は「アキャー」型にならない（森1982）と指摘するように，これまで未確認であった事象である。この連母音［ai］の長母音［æː］への変化は，他の地域の影響，あるいは相互に関連するというようなものではなく，一宇方言内部で，かつて起きた自律的変化であったと言うべきであろう。なお，現在では，このような発音は行われていないようである。

二つ目の事項としては，おちゅうし（お銚子），きりゅう（器量），べびう（べべを），ばりゅう（ばりを＝尿を），さびいぬう（寒いのう），ひづう（ひどう＝ひどく），ちゅう（茶を）といった，ウ段拗長音，ウ段長音を含む語の存在である。これらのうち，きりゅう，ちゅう以外は中世日本語において口をすぼめるオ段長音（オ段合音）を含むものであって，「～シヨー」が「～シユー」に変化している高知方言とも共通する特徴であると言えるのではないだろうか。上記の語の発音の変化は，その一部を示すと，下のような過程をたどっているものと思われる。

おちゅうし［otʃuːʃi ← otʃoːʃi ← oteuʃi］
　オチューシ ← オチョーシ ← オテウシ
べびゅう［bebjuː ← bebjoː ← bebewo］
　ベビュー ← ベビョー ← ベベオ／ベベヲ

なお考察が必要ではあるが，中世日本語の発音をもとに説明してゆくことで，これらの語形が生まれた経緯をたどることができる。

4．文法

1）音便形の使用

（1）形容詞の場合

「お天気が　ヨクテモ　ワルクテモ（良くても悪くても）……是非来てください」

これは，聞き取りの準備をしている間に耳に入ってきた地元の女性の言葉である。形容詞の連用形はウ音便化して，「ヨーテ（良うて）」「ワルーテ（悪うて）」のようになるのが，西日本方言の特徴の一つである。逆に言えば，「良くて」「悪くて」などとは言わないのが西日本方言であった。しかし，十年余にわたる阿波学会での調査の機会に，県内の高年層の人々が非音便形を使うのを多く耳にしてきた。

今回の調査で，形容詞については，「赤くない」「嬉しくて」に相当する言い方として，どのような形を使うかを調査した。調査用紙には，予想される回答を選択肢として示し，また，選択肢に含まれない回答は自由に記述してもらうようにしてある。その結果，ク活用形容詞の「赤くない」の場合，親しい間柄（友達に対して）では9名が「アコーナイ」と音便形を使うと答えたのに対して，目上（学校の先生）に対しては，「アカクナイ」4名，「アコーナイ」4名と回答が分かれ，この聞き取りの際に，場面によって使い分けるという声が聞かれた。なお，「アカナイ」を2名が選んでいる。また，シク活用

形容詞「嬉しい」の場合，親しい間柄では「ウレシーテ」６名，「ウレシューテ」３名，「ウレシクテ」１名であったのに対して，目上（会社の上司）に対する場合には「ウレシーテ」２名，「ウレシューテ」１名，「ウレシクテ」７名という結果であった。

目上の対象が，学校の先生と会社の上司とでは気遣いの度合いが異なるかもしれないが，ク活用の場合よりもシク活用の方が非音便形の使用が進んでいることが推測できる。これは，共通語化の一過程として，ウ音便形と非ウ音便形とを場面に応じて使い分けるようになっているものと結論づけることができよう。ただし，中世末期の京都において，口頭語ではウ音便が用いられているが書き言葉では非音便形が使われていたと推測できる記述が『ロドリゲス日本大文典』に見られる。それは「関東または坂東」の項目にみられる「Xiroqu（白く），Nagaqu（長く），Mijicaqu（短く）などの如く書き言葉のQu（く）に終る形を用ゐる。」という記述である。ここでは，「都」においても「書き言葉」の場合には，非音便形が使われたということであり，ある種のかしこまり，または改まりが要求されるような場面では，音便形が避けられるという習慣が地域言語の場合にもあったのかもしれない。しかし，動詞の場合と併せて考えてみると，共通語化の過程と解釈する方がより妥当かと思われる。

（２）動詞の場合

「買う」「洗う」（ワ行五段活用，古語ではハ行四段活用）の２語についてウ音便形を使うか，促音便形を使うかを訊ねた。言うまでもなく，ウ音便形が西日本方言の特徴であり，促音便形は東日本方言の特徴で，また共通語の形式である。ここでの質問は単に目上に対してか親しい友達に対してかという区別で訊ねた。

「お茶を（買って）くる」の「買って」の部分をどう言うかについて選択肢を用意して選んでもらった。その結果，親しい友達の場合には，９名がウ音便形の「コーテ」を選んだ（１名は無回答）のに対して，目上の場合には，６名が「コーテ」，４名が促音便形の「カッテ」と回答し，「カッテ」と回答した４名のうち３名は女性であった。「洗う」の場合も，「買う」と同様な目上／目下での使い分けの傾向が見られた。「ハンカチを（洗って）きた」の「洗って」の部分をどう言うかについて訊ねたところ，目上に対しては「アラッテ」９名，「アローテ」１名，友達に対しての場合は「アラッテ」４名，「アローテ」５名であった（無回答１名）。

以上の事実から，音便の使用の面では共通語化がかなり進んでいると言えよう。

２）動詞の活用

（１）いぬ（去ぬ）・しぬ（死ぬ）

古語に於いてナ行変格活用であったこの2語は，古代には名詞に続く形（連体形）が「いぬる・しぬる」であり，中世以降，終止形も「いぬる・しぬる」となった。そして近世後半になると終止形・連体形が「いぬ・しぬ」に変化し，四段（五段）活用化が完成したが，方言によってはナ行変格活用が少なくとも昭和期まで残存しており，徳島県下でも半世紀ほど以前には，「山分では用いる」（森1982）と報告されていた。なお，森の記述は昭和30～40年代の状況を反映していると思われる。今回の調査では，１名だけが「いぬる・しぬる」使うと回答，現在でも聞くが自分では使わないというのが２名，昔聞いたことがあるという回答は「しぬる」４名，「いぬる」３名であり，聞いたこともないという回答も「しぬる」２名，「いぬる」３名であった。ナ行変格活用はかろうじて残っているということになる。

（２）下一段活用の「蹴る」

「蹴る」は，打ち消しの「ん／ない」に続くとき「蹴らん／ない」となるのが普通であろう。「蹴る」は打ち消しに続くときに「け」となる下一段活用が平安初期から江戸時代前半期までの形式であり，後半になって徐々に「けらん」という四段活用の形が現れてきた。明治中期以降は「蹴らん／ない」が普通になった。森重幸（1982）によると，木頭や祖谷には下一段の「蹴る」が残るということであり，また『徳島県言語地図』（以下，『徳島2002』とする）では旧池田町と旧三好町北部，旧東祖谷山村と旧海部町で存在が確認されている。今回の調査では，「ボールを蹴らない」の「蹴らない」の部分をどう言うかという質問に対して，「ケン」を選んだのが6名，「ケラン」を選んだのが４名であった。下一段活用の「蹴る」は，まだしばらくは残るようである。

3）打消の表現

「行ケヘン」「見イヘン」といった形を使うかどうか，またこれらを強調否定として「行カン」「見ン」と使い分けているかどうかが山分と中分・里分との違いであるが，いくつかの質問項目の中で，ほとんどは単純な否定形の「～ン」を回答している。ただ，興味深い事実として，単純に否定して「ボールを蹴らない」という場合には「ケレヘン」を選んだものは一人もいなかったのに対して，「ガラスを割った」ことを咎められて「蹴らない」と答える場合に3名が「ケレヘン」または「ケーヘン」と回答している。強く否定する場合に「～ヘン」を使うようになってきていると思える。

4）打消過去の表現

打消過去表現に「行カザッタ」のような言い方をすることは，明治期から徳島においては山分に特徴的なことであった（島田1901・森1982・金沢1976等）。『徳島2002』においても山分に記録されている。この形式の有無は，徳島方言区画の指標の一つと考えられるものであるが，今回の調査では，一宇からはもう失われようとしていることがうかがえた。このことは三つの質問に対する回答から推測できる。

「勉強をしなかった」の「しなかった」の部分をどう言うかという問に対しては，全員が「セナンダ」を選び，「仕事に行かなかった」の「行かなかった」をどう言うかには，9名が「イカナンダ」を，1名が「イカンカッタ」を選んでいる。ところが，「（仕事に）行くことができなかった」の場合には，9名が「イケナンダ」を選んでいるのに，大正14年生まれの男性だけは「イケザッタ」を選んでいる。

山分の方言を特徴付けるだけでなく，高知方言とも共通する「ザッタ」は，もうほとんど使われなくなっている。

5）形容動詞の完了形

形容動詞完了形の表現として「静かだった」の部分をどう言いますかという質問をした。

『徳島2002』では，一宇（1例だけの確認であるが）を除く上郡各地域で「静カナカッタ」が現れているが，一宇では「静カジャッタ」になっている。今回の調査では7名が「静カナカッタ」と回答していて，「静カジャッタ」1名，「静カヤッタ」2名となった。形容動詞完了形については，上郡特有の言い方が残されていると見ていいだろう。なお，「静カジャッタ」は吉野川流域と阿南市周辺の地域で，「静カヤッタ」は下郡各地と県南の海部に多い言い方である。

6）理由を表す助詞ケン・ケニ，キン・キニ

森（1982）によると，理由を表す助詞としてキン・キニを使う地域は上郡一帯となっているが，『徳島2002』の示すところでは，キン・キニの使用地域は三好郡と旧東祖谷山村に限られるようになってきており，一宇でもキン・キニは使わないようである。これについては，「寒いから」の「から」のところをどう言うか，「風が強いので」の「ので」のところをどう言うか，などの四つの質問を用意したが，それに対する回答はほとんどすべてケンでありケニが2例見られただけであった。また，ケニは調査時に耳にしたが，キン・キニは聞かれなかった。

7）ミジョー（可能の副詞）

可能の副詞としてミジョ・ミジョーを使うのも上郡および北方山分の特徴となっている。金沢（1976）では「吉野川上流地方用語」とし，旧阿波町もその使用地とされているが，森（1982）では旧阿波町は含まれていない。また脇町で育った仙波も，そして仙波の叔父もミジョーは聞いたこともなかった語である。さらに『徳島2002』では旧脇町の山間部，旧貞光町，旧木屋平村より西の地域で確認されており，この地域の方言資料にも記録されているところであるが，徐々に失われつつあるとも見られる。そこで，この言い方がまだ残されているかを確認するために，次の質問を用意した。

小さな子供に「1人で買い物に行くことができるか」と聞く場合，「行くことができるか」のところを，どう言いますか。

これに対して，「ヨー行クカ」「ケッコー行クカ」「ミジョー行クカ」という三つの選択肢を用意し，さらにこれ以外の言い方があれば，それを記入してもらうようにしたところ，10名全員が「ヨー行クカ」を選択し，さらに2名の女性が「ミジョー行クカ」をも選んだ。なお，「ヨー行クカ」は県下広く分布している。

8）その他

不可能の副詞として，調査票の質問に対する回答ではヨーだけであり，エーについては「昔聞いたことがある」ということであった。しかし，調査時の談話の中では，「エー（HL）　ハシラン（走らんLLHL）ヨーニ　ナットルノヲ」のようにエーが使われていた。また「来ることができない」に対しては，全員が「コレン（来れん）」という，いわゆる「ら抜き」の形を選んでいて，「コラレナイ（来られない）」は選ばれなかった。

疑問の表現に使われる終助詞の「コ」はほとんど失われているらしい。また，年下に訊ねる場合には「行クカ」を選んだのが９名，「行クデ」が１名出会ったのに対して，目上に訊ねる場合には「行クデ」５名，「行クカ」２名，「行クコ」１名という結果であった。その他，疑問の助詞として「エ」「カエ」が好まれている様子もうかがえる。「明日は仕事があるのか」の「あるのか」に対応する表現としては，「アルンカエ」６名，「アルンエ」３名，「仕事があるのかないのか，どっちなのか」という条件を示して，「あるのかないのか」の部分に対応する言い方を聞いたところ，「アルンエ，ナインエ」と「エ」を使う形を選んだのが７名，「カ」を使うのが２名，「デ」を選んだのが１名であった。また，「どっちなのか」に対応する表現の場合にも「ドッチナンエ」が７名であった。

過去推量の言い方として，「行ッツロー」の形を取るのが山分の特徴であった（金沢1976・森1982・仙波2008など）が，今回の調査で得られた回答は「イタジャロ，イッタジャロ」を合わせて９名の他，「イタダロ・イッタダロ」「イタヤロ・イッタヤロ」がそれぞれ１名ずつであって，「イットロー・イッツロー」の回答は得られなかった。

アスペクトでは，進行相「～ヨル」と結果相「～トル」との区別がかなりはっきりと保たれている。

徳島方言の特色としてしばしば話題に上る「あるでないで」「ないでないで」が意外と使われなくなっているらしいことも分かった。「あなたの弟が鉛筆を探しています。弟の足元を見ると，鉛筆が落ちています。『そこにあるじゃないか』と言う場合，どう言いますか。」という質問に，選択肢を「①アルデー，②アルデナイカ，③アルデナイデ，④その他」の純に示しておいたところ，①３名，②５名，そして③２名という結果であった。「ないでないで」の方でも，「①ナイデー」４名，「②ナイデナイカ」５名，「③ナイデナイデ」２名であった。

５．語彙

前半では，柳田国男以来関心が持たれ，『日本言語地図』の調査項目にもなっていた語であり，『徳島2002』でも調査対象とされた語とそれに関連する語を中心に述べる。また後半では，『村史』に記載された語から選択した項目について述べる。なお，以下の記述ではアクセントの確認できたものには，アクセントを示すこととする。

１）言語地図から選んだ語

（１）カマキリ（螳螂）

森（1962）・金沢（1976）によると一宇には，オガマナトーサン，オガボーシ，オガンボ，ヤンマ，ホトケンマが分布することが報告されている。今回の調査では，９名までがカマキリと回答している。その他として，オガンボーシが１名。これは，『徳島2002』（図１）と同じである。また，聞き取りの中でオガマナトーサンの形も現れてはいる。しかし，今回の教示者の年齢を考えてみると，俚言が急速に失われ，共通語化しているかが分かる。

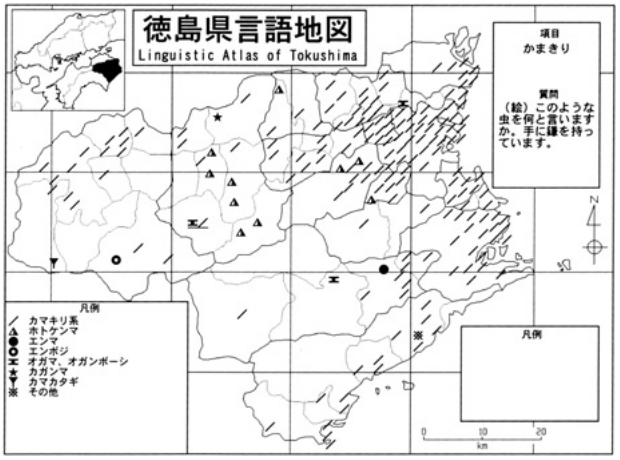

図１　カマキリ

（２）蛇

『日本言語地図』を見ると，一宇ではナガムシがある。さて，今回の調査では全員がヘビと回答していて，一人だけナガムシをも挙げていた。なお，

『徳島2002』ではグチナワもあり，また『村史』には，グチナワ，ヤドシ（青大将）が見られる。ここでも，地域固有の俚言形は失われてきたことが推察できる。

（3）蛙

ヒキガエル（蟾蜍）に対しては，ヒノバン１，ゴート４，カサゴート２，カサゴイト（HLLLL），カサゴイート，カエル３（数字は回答者数）という結果だった。

トノサマガエルの場合は，オンビキ１，サンゲントビ（HHHHHH）８，サンゲン１，サンゲンビキ１となった。なお，ヒキガエルもトノサマガエルもともに，単にカエルという回答もあった。

（4）セミ（蝉）

セミについては，写真を示してクマゼミ（LLHL）とアブラゼミ（HHHHH）について聞いたのだが，アブラゼミに対してアカゼミが一人から回答されただけであり，ここでも単にセミという回答もあった。

（4）トーモロコシ

９名までがトーキビと回答した。共通語形のトーモロコシが１名であった。この結果は，これまでに確認されていることと同じである。『徳島2002』では，下郡にナンバが広く分布するのに対して，上郡はトーキビであった。今後，若年層でどうなっているかを調査する必要がある。おそらく，共通語形のトーモロコシになっているであろう。

（5）芋（甘藷・里芋）

かつて日本語でイモと言えば，それは里芋であった。「芋の子を洗うような」とか「芋名月」という時の「芋」は，どれも里芋である。

さて，里芋とサツマイモ（甘藷）の写真を示し，「『いも（芋）』と聞いたとき，下の絵のどちらを最初に思い浮かべますか」という質問を用意したが，それに対して，ほとんど全員がサツマイモの方と答えた。そのサツマイモを呼ぶ名称としては，リキモ１，リューキューイモ１，リイキイモ４，サツマイモ２，無回答２であり，また，里芋の方はマイモ８，無回答２となった。マイモは，三名（現三好市山城町）・東祖谷・半田・脇町などで使われてきた語で徳島県内では上郡や北方山分に分布する。これらについては俚言形がまだ生きている。

（6）ツクシ（土筆）

全員がツクシを挙げ，他に，ホシコ１，ツクシノボーヤ１であった。ホシコ（ホーシコ）は，東祖谷・半田・神山の方言資料に見られ，また『徳島2002』では，一宇の他，三好市池田町に見られる語であり，『日本言語地図』では，香川・愛媛に広く分布する語形である。

（7）梅雨

ナガセ（LHL／LLH）８，ツユ４であった。二人は両語形を回答している。大正生まれと昭和10年代生まれの人がツユを挙げ，昭和20年代生まれの人がナガセを挙げている。これまでの他の地域での調査の際には，ナガセをこちらから示して思い出してもらうということもあった。今回の結果を見ると，まだナガセが生き残っているが，いずれツユに代わられてしまうのであろう。

（8）夕立・にわか雨など

「夏の夕方，とつぜん降ってくる雨」は，全員がユーダチ（HHHH）を答え，一人がサダチ（LHL）も回答した。

「（季節に関係なく）突然降ってくる雨」については，ニワカアメ（LLLHL）８，ユーダチ４，サダチ１，トーリアメ１であった。六人はユーダチとニワカアメを区別しているが，四人はこれらを区別していない。

「台風の時などに見られる，縞が横に走るような雨の降り方」を聞いたところ，イッカケブリ６，イッカンブリ１，ドシャブリ３，特別な言い方はない１という答えとなり，木沢・上那賀・神山から愛媛県山間地域にかけて分布すると思われるサオカタギは確認できなかった。

２）『村史』に収録された語から

『村史』の見出し語は『村史』にしたがって平仮名で示し，それ以外は片仮名で記すこととする。

『村史』に記録された方言語彙の中には，すでに死語となった語が少なくない。ここでは，それらおよび他の特徴的な語について述べる。祖谷や高知とのみ関連する語には特に着目して記述する。語の配列は，『村史』の順にしたがう。片仮名表記した語が死語に変わって使われる語である。なお，資料の内，金沢治『改訂阿波言葉の辞典』は『阿波』，俵

裕「祖谷の方言」(『ひがしいやの民俗』)は『祖谷』と示す。

ほうげた（ほほの骨あたり）…ホータンベラ

どうのくぼ（首の後頭部付根のあたり）…あまり使わない。クビノウシロと言う。

きりぶさ（かかと）…あまり使わない。

ふたいばち（ひたい）…ヒタイバチ（HHHHH）

おどり（乳児の頭頂）

はなげた（鼻すじ）…ハナスジ（HLLL）

ねぶいち（固い根のある腫物）…ネブチ（LLH），ネブト（LLH）を使う。

へこきあな（肛門）

他の資料に見当たらない語である。

ここ（大便（小児））

ぎゃーる（蛙）…カエル

うずぶし（LHLL）…トリカブト

「うずぶし」は他の資料に見られない。おそらく，漢方薬としてトリカブトの根を指す語の「烏頭（うず）・付子（ふし）」が一語となったものであろう。なお，貝原益軒の『養生訓』には「烏頭附子等の熱薬」とある。

くろ木（ぶな，ならの類，本来はもみ，つがの類）

ふど（ふどいも）（じゃがいも）…ジャガイモ

おとろぎそう…オトギリソー

ごしいも…ゴーシモ，ジャガイモ

こうぢゅう（夜盗虫）…ヨトームシ，ヨトムシ

ねずみのはなつき（ひいらぎ）…オンノメツキ（HHHHHH）　高知県の資料には見られるが，県内の資料には見られない語である。県内ではオニノメツキが普通。

しゃれこつ（枯木，朽木）(LLLL）…立ち枯れの木。東祖谷でシャレッコ。他の資料には見られない。

よめのさら（ねずみもちの木）…ヨメンサラ（LHHHH）　東祖谷でヨメノサクラ。なお，『阿波』や『祖谷』では，ヨメノサラはイヌツゲのことと記されている。

たた（母）（LH）…幼児語。稀。祖谷，半田，脇町，木頭の資料に記載があるが，『阿波』では古老の語という評価になっている。

わ（妻）…死語。他の資料にも見られない。

おやがた（実家の方の兄）…山分の用語であるが，もう使わない。アンニャと言う。

おいとこ（同輩）…仲のよい同輩を呼ぶときに使う。上郡の用語である。

おたひ・おたい（私）…女性が自分を称する語である。昔，三野で聞いたことがあるが，一宇では聞いたことがないとのこと。

あのし（彼ら）…アノシラ（HLLL）。その他大勢という感覚の言葉。ただし，ほとんど使わない。

おんだく（自分の家）…使わない。オランクは使う。

げ（庇の部分）…家の隅の方をゲノスミと言う。東祖谷でゲイ。半田ではヤマト。その他の地域では，オブタ，オーブタが普通。

いどの（LLL)（汚水溜）…小便所である。半田では風呂のこと。祖谷では風呂をも指した。

ごき（HL)（椀）…もう使わない。

そうけ（笊）…もう使わない。

すず（徳利）…オミキスズ（LLHLL），カンピン（LHLL）と言う。

おちゅうし（お銚子）…オチョーシ

もっくう（もっこ）…モッコ

おかっち（お菓子）…使わない。なお，菓子の発音は合拗音を含むクヮシであったはずだが，そのようになっていない。この地で合拗音が早くに失われていたことを示すのであろうか。

ものぐ・ものご（LHL）（入れ物，器）…モノゴは使わない。同様に，いれものぐ（LLLHL）は使うがイレモノゴは言わない。

いかだな（涼み台）…床棚（ゆかだな）の転であろう。ショーギ，スズンダイ（LLLLL）と言う。

たほ（LH）（太布）…豆腐をこすときに使った。なお，この語はもう使わない。

はりだほ（新春に織った太布）…使わない。

ぼんぐ・ぼんご（LHL）（盆の晴れ着）…ボングの方は使わない。

ねこだ（LHH）（背負い籠）…木の皮で作っていた。オイメゴとも。『祖谷』には，「桜の木の皮か，けやきを薄くそいで編んで作った篭，山仕事の弁当入れ」とある。徳島では，祖谷以外の資料に見られない。

にごさ（LLH）（どぶろく，濁酒）…昔の語。ドブザケとも。なお，祖谷ではニゴザ（俵1990）。

とんとこいき（LLLLLL）（晴れ着）…他には祖谷のみ。

つんぼきび（炒ってもはぜないとうきびの豆）…トウモロコシを炒ったオイリ（炒り豆）を作ったことは『祖谷』に記されている。

じきたび（LHLL）（地下足袋）…この語は県下広くで使われていた。

てのごい（手拭い）…テヌグイと言う。

くで（LH）（糸紐）…クデヒモ（HHHH）と言う。

ちょこちん（提灯）…チョーチン（LHLL）と言う。

ゆるり（囲炉裏）…イロリと言う。なお，中世においては，京でも使われていた。明応本節用集〔1496〕「火爐 ユルリ 或作地炉」

かんじ（かんじょう）（母屋と別棟になった便所）…今は使わない。『阿波』にすでに「稀・古」と評価されている。

ひぢゃ（ひやな）（家の裏）…『祖谷』には，「ヒジヤ　家の裏」とある。木屋平や神山上分ではヤズマ。

どうけ（水溜桶）…井川，半田，木屋平，岩倉，神山の資料に見られる。山分の用語。

そばいねり（いねり）（そば粉の湯ねり）…普通は，ソバネリという。木屋平，新居メモにあり。

くらら（雹，あられ）…祖谷では「霰（まれに言っていた）」（『祖谷』）。また，高知市，高知県長岡郡では「つらら」のこと。

ゆうさ（ようさ）（夜）…ヨーサは県内各地の資料に見られるが，ユーサは見られない。

きにょうのばん（一昨夜〔昨夜でない〕）…「一昨夜」のことをキニョーノバンと言うのは高知方言の特徴の一つである。徳島では「昨夜」のこと。

がいけ（風邪）…今は使わない。なお，徳島県の資料では，『阿波』に「咳気（海部）」を上げるだけであるが，岐阜県，静岡県，岡山県，香川県の方言集には記録されている。

おかっぽち（丘の上）…オカッパチ（LLLLL）と言う。『阿波半田の方言』には「山の頂上」，『阿波』には「山の頂の草原＜山分＞」とする。

さこみ（HHH）（谷間）…方言としては，『池田町誌』に「迫になっている所。」と出ているだけ。

ふんばし（HHHH）（便所の踏板，便所の踏竹）…昔の言葉。『祖谷』以外に見当たらない。

くさぶけ（草原，草深い所）…クサボケと言う。なお，クサブケは，『祖谷』にあるほか，『阿波』では「山分」とするが，『山川町誌』にも見られる。県外では鳥取県気高郡，岡山県苫田郡の資料に出ている（『日本方言大辞典』）

あえ（あちらの方）・こえ（こちらの方）・そえ（そこらあたり）…これらはもう使われていない。

ぎょす（寝る）…ギョシナル（御寝なる）の省略形と思われる。今は使われていない。

うだく（抱く，かかえる）…古語である。今は使わないが『祖谷』の他に木頭にも方言として記録がある。

おだけがおれる（LHLLLLL）（しんぼうが出来ない）…『阿波』『祖谷』と佐那河内に見られる。今は使われない。

ひゃりこんだ（閉口した，まいってしまった，へこんだ）…今は使われない。また，他の資料に見られない。

どわれ（LLH）（どうせ，結局（どうともあれ））…今でも使われるが，他の資料に見られず。

すでんこ（LHLL）（豪気な，野放図な）…井川町誌にスデンコイがある。ホッコイキに同じ。

ほっこいき（LLLLH）（前後を考えない，無茶な）…『祖谷』だけに見られる。『祖谷』にあるホッコウモノ（呆けもの，無茶者，乱暴者）と語根を同じくするものであろう。スデンコに同じ。

てすりこんぼ（陳謝，手をすり合せて謝る）…県内方言資料には『祖谷』に見られるだけである。今は使われない。なお，16世紀末の『羅葡日辞書』に使用例がある。「tesuriconb?（テスリコンバウ）シテ モトムル」

にあらいかえ（すごいことをする）…使われない。また，他の資料に見られず。

こっぽり（ふる）（雪などが沢山（降る））…この意味を記す徳島方言資料見当たらない。『阿波』，

半田，木屋平，木沢で「全部・根こそぎ」の意味を示している。なお，『日本方言大辞典』では，山形県庄内，富山県砺波，福井県で「たくさん」の意のコッポリがあることを示し，『日本国語大辞典』には，月山〔1974〕〈森敦〉「雪は杉の立ち木にも，本堂，庫裡の屋根にもこっぽりと積もって，なおシンシンと降っています」の例が挙げられている。

ずんきゅうな（向ういき強い，無鉄砲な）…『阿波』や森本（1979）の他には『祖谷』に見られるだけである。

参考文献（１）

秋永一枝，上野和昭，坂本清恵，佐藤栄作，鈴木　豊編（1998）『日本語アクセント史総合資料研究篇』　東京堂出版.

生田早苗（1951）：「近畿アクセント圏邊境地區の諸アクセントについて」『国語アクセント論叢』法政大学出版局.

上野和昭・仙波光明・森　重幸（1991）：「徳島県三好郡山城谷アクセントの動向―二拍名詞を中心に―」『徳島大学国語国文学』４号.

上野善道（1985）：「日本本土諸方言アクセントの系譜と分布（１）（２）」『日本学士院紀要』40巻２号　日本学士院.

上村幸雄他（1972）『日本言語地図』第５集　国立国語研究所.

神鳥武彦（1982）「広島県の方言」『講座方言学11　中国四国地方の方言』国書刊行会.

岸江信介・仙波光明・岡田祐子・村田真実（2010）「徳島県吉野川流域アクセントの動態―吉野川流域南岸グロットグラム調査報告（2）―」徳島大学大学院国語学研究室.

金田一春彦（1974）：『国語アクセントの史的研究原理と法則』塙書房.

坂本清恵・秋永一枝・上野和昭・佐藤栄作・鈴木　豊編(1998)『「早稲田語類」「金田一語類」対照資料』　アクセント史資料研究会.

仙波光明・岸江信介・石田祐子編（2002）『徳島県言語地図』徳島大学国語学研究室.

仙波光明（2008）「美馬市木屋平村の方言」『総合学術調査報告第54号　美馬市木屋平村』阿波学会・徳島県立図書館.

平山輝男・上野和昭（1997）『徳島県のことば　日本のことばシリーズ36』明治書院.

虫明吉治郎（1982）「岡山県の方言」『講座方言学11　中国四国地方の方言』国書刊行会.

森　重幸（1962）『徳島県のカマキリの方言』私家版.

――（1982）「徳島県の方言」『講座方言学11　中国四国地方の方言』国書刊行会.

山名邦男（1956）：「徳島県下の音調」『兵庫方言１』兵庫県方言学会.

参考文献（２）

徳島県下の方言の所在は，以下の資料を検索の対象とした。

相生町誌編纂委員会編（1973）『相生町誌』相生町.

藍住町史編集委員会編（1965）『藍住町史』藍住町.

井筒　茂編（1931）『稿本　宝田村誌略 巻九』井筒　茂.

井上一男（1937）「木頭地方々言語集」『郷土阿波　14号　通巻14』阿波郷土会.

鬼篭野村誌編集委員会編（1995）『鬼篭野村誌』鬼篭野村誌編集委員会.

金沢　治（1976）『阿波言葉の辞典』小山助学館.

金沢浩生・仙波光明・岩佐美紀・石田祐子（2001）「相生町の方言」『総合学術調査報告　相生町　阿波学会紀要　第47号』阿波学会・徳島県立図書館.

上那賀町誌編纂委員会編（1982）『上那賀町誌』上那賀町.

上分上山村誌編集委員会編（1978）『上分上山村誌』上分上山村誌編集委員会.

神山町成人大学編集部編（1990）『神山の方言と言い伝え』神山町教育委員会.

鴨島町（1940頃か）『鴨島読本』鴨島町.

川島信夫・森　重幸（1992）「半田町の方言」『総合学術調査報告半田町　阿波学会紀要　第38号』阿波学会・徳島県立図書館.

木沢村誌編纂委員会編（1976）『木沢村誌』木沢村誌編纂委員会.

國見慶英（1999）『脇町の方言と語詞』國見慶英.

木屋平村史編集委員会編（1996）『木屋平村史』木屋平村.

島田泉山（1901頃）『阿波希ん奴』（稿本）.（仙波光明（1995）「徳島大学方言研究会報告４　資料紹介『阿波希ん奴』」『徳島大学国語国文学　第８号』徳島大学国語国文学会.）

尚学図書編（1989）『日本方言大辞典』小学館.

神領村誌編集委員会編（1960）『神領村誌』神領村誌編集委員会.

田村　正編（1968）『三名村誌』山城町.

俵　裕（1990）：「祖谷の方言」『ひがしいやの民俗』東祖谷山村教育委員会.

土壁重信（1976）『消え去りゆく大里言葉』土壁重信.

西方村誌編集委員会（1983）『西方村誌』西方村誌編集委員会.

日本国語大辞典第二版編集委員会・小学館辞典編集部（2001）『日本国語大辞典　第二版』小学館.

橋本亀一（1939）『阿波の國言葉』国書刊行会.

羽ノ浦町誌編纂委員会編（1995）『羽ノ浦町誌 民俗編』羽ノ浦町.

半田町方言保存会編著（2005）『阿波半田の方言』半田町方言保存会.

ふるさと佐那河内編集委員会編（1992）『ふるさと佐那河内』佐那河内村.

森本安市（1979）『たのしい阿波の方言』（阿波文庫７）南海ブックス.

西内滝三郎（1920）『一宇村誌』一宇村.

三木近太郎（1954）『古宮村誌』（稿本）古宮村郷土研究会

『美馬郡木屋平村の方言』
http://www.tcn.ne.jp/~nankai/hougenn.htm

『牟岐町の方言』
http://www.mugitown.jp/bunkzai/hogen/hogenfr.html

鷲敷町史編纂委員会編（1981）『鷲敷町史』鷲敷町.

おわりに

今回の調査では，以下の方々にお教えをいただいた。記して感謝する（順不同・敬称略　括弧内は生年）。

葛籠澄子（昭和９）・葛籠キヨミ（昭和27）・切中時成（大正14）・臼木邦彦（昭和10）・広沢光雄（昭和13）・長谷川數義（昭和５）・田中重行・藤澤和子（昭和18）・桑平　稔（昭和22）・大石優子

なお，執筆はアクセントに関しては村田が，その他については仙波が行った。

Dialect of Ichiu area in Tsurugi Cho, Tokushima, Japan.
SENBA Mitsuaki, MURATA Mami,
Proceedings of Awagakkai, No. 57 (2011), pp. 165－176.